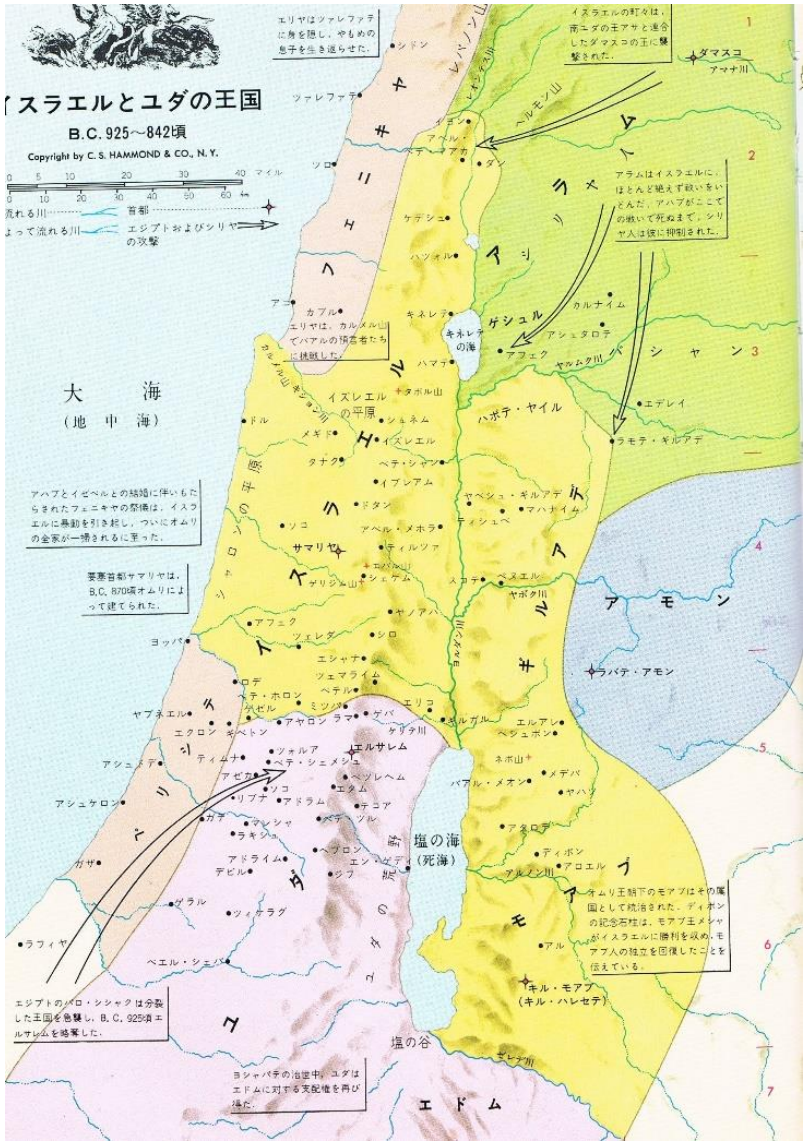

2022年3月20日　説教「アハブの死」

列王記第一22章29～40節

アハブ王は預言者ミカヤを獄に入れました。ラモテ・ギルアデへの戦役に行けば、アハブは無事に帰ってこられないことを預言していたからです。

1．アラモテ・ギルアテ奪回を目指し（29～31）

①進撃（29）**「こうして、イスラエルの王とユダの王ヨシャパテは、ラモテ・ギルアデに攻め上った。」**預言者ミカヤの促しを拒否したイスラエルの王アハブは、ユダの王ヨシャパテを伴って、アラムとの国境にあるラモテ・ギルアデへの進軍をします。その場所はもともと自分達の町であり、奪い返さねばと、アハブは考えていたのです(3節)。ヨシャパテ王はミカヤの預言を聞いたはずですが、結局アハブの誘いに応じて、一緒に戦役に出ることになったのです。信仰面では違いを感じていたはずですが、イスラエル王アハブには、兄弟分という思いをもっていたのでしょう（4節)。

②変装をする作戦（30）**「そのとき、イスラエルの王はヨシャパテに言った。ス『私は変装して戦いに行こう。でも、あなたは、自分の王服を着ていてください。』こうして、イスラエルの王は変装して戦いに行った。」**アハブは、自分は変装して戦いに行くが、ヨシャパテには王服で行くようにと言います。これを自分だけが助かり、ヨシャパテを身代わりにさせようとする保身行為なのでしょうか。それとも、単に自分は変装するけれど、あなたはどうしますかといった意味合いなのかはわかりません。

③王を狙え（31）**「アラムの王は、自分の配下の戦車隊長たち三十二人に命じて言った。『兵や将校とは戦うな。ただイスラエルの王をめざして戦え。』」**アラムの王はかつてアハブがその命を助けたベン・ハダデでありましょう。彼はアハブから命を取られずに済んだことについて恩義など感じていませんでした。主が戒められたように聖絶しなければならない相手であったのです（20：42)。ベン・ハダデは戦車隊長達、32人にイスラエルの王アハブを打つように命じたのです。兵や将校たちはどうでも良いから、イスラエルの王を狙えというものでした。

2．何げなく放たれた弓矢（32～36節）

①ヨシャパテ王の叫び（32～33）**「戦車隊長たちはヨシャパテを見つけたとき、『確かにあれはイスラエルの王に違いない』と思ったので、彼のほうに向かって行って戦おうとした。すると、ヨシャパテは助けを叫び求めた。それで、戦車隊長たちは、彼がイスラエルの王ではないことを知ったとき、彼を追うことをやめ、引き返した。」**戦車は二輪車でタイヤは木製です。馬に引かせて進みます。1～4人が乗り

ました。戦車隊長たちは王服を着た相手を見つけ戦いにのぞみます。しかし、それはユダの王でした。ヨシャパテは自分がイスラエルの王ではないことを知らせ、助けを求めました。アラム王はイスラエル王アハブを狙うことを命じていたので、彼らはヨシャパテを追いませんでした。

②弓が射抜き（34）**「ところが、ひとりの兵士が何げなく弓を放つと、イスラエル王の胸当てと草摺りの間を射抜いた。そこで、王は自分の戦車の御者に言った。『手綱を返して、私を敵陣から抜け出させてくれ。傷を負ってしまった。』」**ところがです。ひとりの兵士がねらってではなく、弓を放ったところ、アハブ王が装着していた胸当てとその下の草摺りの間を射抜いたのです。そこで、彼は戦車を御する人に、その場所から逃れるようにいうのです。傷を負って戦う状態ではなかったからです。

③アハブの血は（35～36）**「その日、戦いはますます激しくなった。王はアラムに向かって、戦車の中に立っていたが、夕方になって死んだ。傷から出た血は戦車のくぼみに流れた。日没のころ、陣営の中に、『めいめい自分の町、自分の国へ帰れ』という叫び声が伝わった。」**戦いが激しくなる日の夕方、アハブは死にました。彼の傷から出た血は、戦車の床に流れたのです。王の死は戦の終わりを示していました。兵士たちには、自分の町に帰るようにとの促しがなされました。

３．**アハブの終焉（37～40 節）**

①王の葬り（37）**「王は死んでからサマリヤに着いた。人々はサマリヤで王を葬った。」**アハブ王の遺体はサマリヤに運ばれました。本人も周りの者たちも想定していないことでした。変装していましたから、相手から、ピンポイントの攻撃はされにくい状態でしたが、いのちを終えました。不信仰のさばきという言葉が出てこなかったのは、主のご配慮でありましょうか。

②犬が彼の血をなめ（38）**「それから、戦車をサマリヤの池で洗った。すると、犬が彼の血をなめ、遊女たちがそこで身を洗った。主が語られたことばのとおりであった。」**アハブが戦死した時に乗っていた戦車には、彼の血がその床を染めていましたが、犬たちがその血をなめました。あのナボテのぶどう園をもぎとろうとしたときに主は、「犬どもがナボテの血をなめたその場所で、その犬どもがまた、あなたの血をなめる（(21:19）と預言されましたが、今まさにそれが実現したのでした。

③象牙の家（39～40）**「アハブのその他の業績、彼の行ったすべての事、彼が建てた象牙の家、彼が建てたすべての町々、それはイスラエルの王たちの年代記にしるされているではないか。アハブは彼の先祖たちとともに眠り、その子アハズヤが代わって王となった。」**アハブが国の王としてなした業績の中には、象牙細工が調度品としてあるような王宮がありました。それは、この世の繁栄をあらわすものであったでしょう。一方霊的側面では、妻イゼベルとともに、バアル信仰に身をやつしたという汚点がありました。その生涯は、イスラエルの王として、神に立ち返ることを期待されて、憐みもうけましたが、結局は自己の主張を通して命を落とす最後でした。その子アハズヤが王になりました。

《結論》

アハブという一人の人間。イスラエル王という地位があったからこそ、第一列王記には、彼に関する記事が相当にあります。彼はユダと並んで、神を見上げる民として始まった国を、神信仰に基づいて治めていかなければならなかったのです。それにもかかわらず、アハブは偶像神バアルにうつつを抜かしていました。偶像神の方が彼の政治にとっては都合が良かったからです。自分の思うように、利用することができたからです。要するに人間中心とは別の言い方をすれば、自分中心、自己中心です。

この章においても、アラムに奪われた地ラモテ・ギルアデを取り戻すために、御用預言者 400 人にそこを攻め込むことを賛成させました。ヨシャパテにより引き出された預言者ミカヤははっきりと、全イスラエルが「飼い主のいない羊の群れのように散らされている」という幻を語りました。そのまま進むならば、王の命はたられてしまうことになることを語ったのです。アハブはミカヤの預言を聞いて、不機嫌になり、投獄してしまいました。アハブは自らの欲望や考えを実現する後ろ盾として、信仰を利用することになりました。この時代の支配者であるプーチン氏も自らの欲望や支配を実現するために、恐怖政治を敷き、戦争を開始して、結果として多くの人々の命が失われています。専制的権力者はどの時代にあっても、自らの欲望を実現するために、争いに突き進もうとするのです。

アハブは自らのなしたことを、結果として、自分で摘み取らなければなりませんでした。ラモテ・ギルアデを取り戻す戦いに変装して出かけて行きました。自分の命を守るための備えをしたのです。ところが、王服を着ていたヨシャパテは助かりましたが、変装したアハブは防御具の間隙に矢が突き刺さり、命を取られたのです。それも、相手の兵士はねらったのでもなく、何げなく、放った矢が命中したのです。神の関与を考えるしかありません。

アハブはこうしてこの世の命を終えましたが、新約聖書の観点からすると、さらに重大なことに目をとめなければなりません。それ

は「罪の支払う報酬は死です。」（ローマ人への手紙 6 章 23 節）というポイントです。この御言葉の言う死というのは、霊的な死のことです。聖書をよく読んでいた太宰治が、死は怖くはないが、その後のさばき（霊的死）が怖いと記していました。イエス・キリストは、人間が霊的な死ではなく、賜物としての永遠の命（ゾーウェー）を私たちが得るために、ご自分の命を十字架上で投げ出してくださったのです。私たちがこのゾーウェーなる命をいただくために必要なことは行いではありません。ただイエス・キリストを信じる信仰です。

　アハブにも何回も、神に立ち返る機会がありましたが、自らそれを退けてしまいました。「主にありてぞ、われは生くる、われ主に、主われに、ありてやすし」「主にありてぞ、われ死なばや、主にある死こそは、いのちなれば」（讃美歌 361:1、2）。主を信じて生きることが救いの道です。主への信仰は肉体の死をこえて、いのちをいただく道です。主を信じていきましょう。